サヌト人問ベバ、カユヨリモ寢タルハ、ハルカニ味ヨキ也ト答ケリ、コレホドニ法喜禪悅ノ食ヲアヒセバ、佛道遠カラジ、カクノゴトク、或ハ詩歌管絃ニスキ、或ハ博奕田獵ヲコノミ、色欲ニフケリ、酒宴ヲアヒスル人、是ニヨリテ財寶ノ費、身命ノホロビ、病ノオコリ、禍ノキタランコトヲワスル、世間ノコトゴノム所、コトナルガゴトシ、

〔百家琦行傳〕菖蒲革馬肝

馬肝は麻布白銀に住し、俳諧を業とす、常に菖蒲革の摸樣をこのみ、衣服は上下とも皆菖蒲革色にそめ、三角のもやうをちらし、家の壁など綠革のもやうにはり物し、器財もおほくは萌黃いろになし、三角に制したる器をもてり、三度の食事すら握り飯を三角に制させ、常に是を食しけり、最滑稽なり、一時社中の人々、何ぞ宗匠の悦ぶものを贈べしと、互にいひ合せ、一人は菖蒲革の夾帷をおくる、一人は三角に火鉢を燒せておくりけり、今一人は薑擦をおくりけるが、馬肝これを殊のほか懽喜しとぞ、○中略

島の勘十郎

元祿の頃、京都室町通三條の南に、櫻木勘十郎と云ひし者在けり、古器古書畫の鑑定をよくしたり、這人つねに縞のものを好み、衣服より帶、足袋にいたるまで、色々の縞を著し、扇のもやう副刀の鍔、さや、柄糸、印籠、雪踏の緒までも、みな縞ならずといふ事なし、旦暮の食事にも、鱠はさらなり、汁は千蘿蔔、かうのものも新漬と古漬と行儀よくきざみ双べ、煮物は大根、牛房、胡蘿蔔など、ほそく切てならべ、縞のごとく器にもり、魚の類も鰆、しま鯛、すぢ鰹、すべて筋あるものを用ひ、椀折敷のたぐひは、皆縞にぬらせ、婢女、奴僕にいたるまで、殘ず縞の衣服を著せたり、然ども狂て異を好むにあらず、天性かくありしとぞ、家居も世にめづらしく、樓上の格子さま〴〵の縞にくみ建、店頭もいろ〳〵の唐木もて、おもしろく組建し縞の格子、ひさしの垂木は紫竹と寒竹にて、三本づ